

---

雉

時雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雉

### 【Nコード】

N 6 6 5 2 A

### 【作者名】

時雨

### 【あらすじ】

一応普通の高校生の前原やよいはある日、一羽の怪我しているキジバトを発見し、手当てしようとか家に持ち帰るが、そのキジバトはしゃべるわ、訳の分からないことを言うわ、拳げ句の果てには人間に変身するわ。そのせいで、やよいの日常は大きくかわった。

## エピソード

雨の中、薄暗いところに一人の青年が立っていた。

周りには誰もいない。土は水を吸って、泥になっている。

突然、泥となった土から、何十体、何百体もの魔物が青年を取り囲むように現れた。

青年は全く焦らず、ただ周囲を見渡した。

そして刹那、見えない何かですべての魔物を切り裂いた。

辺りは突如、血の海と化した。

「おいおいやつこさん達。もつとまともな奴はおらんのか？」

青年は軽い関西弁でそう言った。

だが、余裕を見せすぎたらしい。背後からの敵に気づくのが遅かった。

「死ねえ！！」

敵の剣をかわしきれなかった。だが、急所はうまく避けた。

「背後から斬りつけてくるとは　なかなか汚い手口やなあ

」

「ふふふ。あなたにはこのくらいしないと殺せないでしょ？」

敵は女だった。その女は口元にうっすらと笑みを浮かべている。

「　悪いなあ。俺はそう簡単に死なへんで　。」

「でも立っているのがやつとのようなね。さすがの雉でも。」

雉と呼ばれた青年は表情をゆがませた。本当に立っているのがやつとのようなのだ。

女はその様子をしっかりと見ていた。さらに口元の笑みを深めてこう言った。

「じゃあ、そろそろ死んでもらおうかしら。」

女は刀を握り、雉に向かって振り下ろそうとした。

だが突然、雉の体が光った。

「な　なに!？」

焦る女を見ながら、雉は苦しそうに告げた。

「　悪いなあ。　　まだ　死ぬ訳にはいかんのや

そう言うと、雉の体は光に包まれ、消えていった。

」

光に包まれた雉が気がついたのは、コンクリートの道ばただった。  
周りは夕焼け色に染まっている。

だが、1分もしないうちに、コンクリートは雉の血で赤く染まろう  
としていた。

「　あかん　　もう　　限界や

」

雉は人間からキジバトに姿を変えていった。

そうして静かに気を失った。

雉は時を超え、雉にとっては未来の“現代”に来てしまった。  
。

## 出会いは道ばたで

「・・・うわー、もうこんな時間！？早く帰らないと!!」

もう日が暮れ、空は薄暗くなっていた。周りには誰もいなく、静まりかえっている。

彼女の名前は前原やよい。雪咲高校に入学して約3ヶ月、だいぶ高校に慣れてきたまあ普通(?)の高校生で、現在生徒会に入っている。

生徒会の仕事はあまり楽じゃないらしく、むしろ大変で、今日も居残りして仕事をかたづけていた。

「何で同じ1年の子は仕事ないのよ！これってイジメじゃないの！？あーもう！！今日は大事な日なのに！！これじゃあ今日厄日じゃん！！」

やよいは一人でぶつぶつと呟きながら、猛スピードで走った。学校から家まではそう遠くない。

ふと見たのは家の近くの曲がり角。この角を曲がったら家はすぐそこだ。

「よかった！思ったより早く家に着きそう！」

そう言っつてその角を曲がろうとした そのとき。

“ゲシッ”

何か柔らかい物を蹴ったような？

やよいは止まって周りを見てみると、周囲には羽が何枚か散らばっていた。

そしてそこには、おそらくさっきのやよいの蹴りを受けてしまったであろう鳩が、ひっくり返っていた。

「…ひ ひよっとしてわたしが殺しちゃった！？」

慌ててその鳩に近寄った。運良く、その鳩は気絶していただけで、ちゃんと生きていた。

「よ よかった（よくないだろ）。あ、でも怪我してる！手当してあげないと！」

やよいはその鳩をそっと拾い上げた。そして両手に抱いて、また家まで走っていった。

その選択が、後に後悔することになるとは知らずに。

鳩に気を取られてるうちに、もう辺りは真っ暗になっていた。  
「ただいまー！！」

「やよいお姉ちゃん遅い！今日はわたしの誕生日なのに！！」

「ごめん！すみれ。でもわざわざ待っててくれたんだ。ありがとう。そして誕生日おめでとう。」

「：／／分かればいいの！」

すみれはやよいとは5つ離れた妹で、意外なところで結構鋭い。

「ところでお姉ちゃん。手に持ってる物なに？」

「あ これは 道ばたで拾ったの。怪我してた（怪我させた）から。」

「かわいそう。大丈夫？この子。しかもキジバトじゃん。」

「大丈夫だよ。ちょっと待ってて。この子の手当てしてくれるから。」

「あ、下におりてくるときは、あのペンダントしてきてね！」

「はいはい。」

やよいはそう言って、急いで2階の自分の部屋へ向かった。

「お姉ちゃん大丈夫かな。すっごくぶきつちよだから ちゃ  
んと手当できるのかな。」

そして、やよいの部屋では

「手当はこんなもんでいいかな？いいよね！よしOK！！」

彼女いわく手当は終わったらしい。

だが、その鳩は頭以外すべて包帯でぐるぐる巻きにされていて、飛

ぶことはおるか、羽を動かすことすらできない状態だった。  
はつきり言つてこれでは手当どころか怪我が悪化しそうだ。

しかしやよいはすっかり満足したようで、服を着替えてペンダントをつけていた。

どうやらそのペンダントは去年、妹が姉に渡したプレゼントらしい。支度が済んだので、下におりようとした。だがそのとき、鳩が少し動いた　ように見えた。

「あれ？ひよつとして気がついた？」

そう思つてよく見てみたが、まだ気絶していた。

「そういえばなんかこの子地味だな（お前のせいだろ）。」  
包帯まみれにしても、たしかにこの鳩は地味だった。

「そうだ！このペンダントの色違いがあつたから、それをつけてあげたら　。」

と言つて、つけているのとは色違いのペンダントを手に取り、その鳩にかけた。そのとき

「　　いつてえ！！　　なんやこれ！！おいお前！！なんちゅーことを　」

「・・・！！？」

やよいは一瞬、何が起つたのか分からなかった。だがすぐに大声で叫んだ。

「ええええええええええ！！　　は　　鳩が　　しゃ　　しゃしゃ　　しゃべつた！！？」

「驚くより先にこの包帯とペンダントをなんとかせえ！！」

しゃべる鳩は必死に抗議するが、やよいは全く聞いてない。

「な　　なによ！！　　キシバトでも普通は　　」

「あ　　アホ！！　　それ言つたら　　」

鳩がそう言つた瞬間、ものすごい光がやよいとその鳩を包んだ。

「な　　なによこれ　　」

そう言つて、やよいは意識を手放した。

「くそ　　」



その鳩も同じように、気を失った。

すぐに光は消えたが、やよいと鳩のペンダントだけは光輝いていた。

## 終わりと始まりの境界線

「            やん            ちゃん            お姉ちゃん            」

小さな妹のささやきに、やよいは目を覚ました。

「あれ            ？わたし            」

「何やってたの！？いきなり大きな声出したから様子見にお姉ちゃんの部屋に行って入ろうとしたら、いきなりまぶしくなってそれから少しして落ち着いたから部屋をのぞいてみたらお姉ちゃん倒れてるし。なんかあったの？」

「            えっと            」

そういえば何があったかよく覚えていない。

（たしか、キジバトの手当をして            そうだ！！あの訳の分からないキジバトは！？）

ふと辺りを見渡したが、それらしいものはどこにもなかった。

「ゆ            夢            だったのかな            ！？            」

「何が？そういえば拾ってきたキジバトは？」

「あ            どこかに行っちゃったんじゃないかな            ？それより早く下行こう。」

妹は少し首をかしげていたが、すぐに、

「わかった。じゃあ下いこ！」

と言った。やよいも後に続くようにして部屋を出た。

（なんか背中になんか付いてるような            気のせいだよね！！）

『誕生日おめでとう！すみれ！』

「ありがとう！お父さん、お母さん！」

「これは、父さんと母さんからのプレゼントだ！」

「わー！！あけてもいい！？」

「いいわよ。」

家族はすっかりすみれの誕生日にとけ込んでいた。

だがやよいは、ついさっきのキジバトの事が頭から離れなかった。

（あのキジバト いったい何者！？しかもどこ行っただろう

って、なんでしゃべる変な鳩の心配してるのよ！！あいつのせいで気を失っただから！！）

家族とは少し離れたところにぼつんと座っていた。

「そうよ！！悪いのは全部あの鳩よ！！」

「お前があんなことするからやる？」

いきなり背後から声がした。驚いて後ろを見ると、足下にキジバトが転がっていた。

「な なんてまだここにいてるわけ！？！？ま まさか背中 of 妙な違和感は」

「やよい？どうかしたの？やよいもこっちにいらつしやい。」

しかしやよいは、今は誕生日よりこのキジバトの方が気になって、

「ごめんお母さん。ちよつと調子悪いから部屋で寝ていいかな？」

といって、猛スピードでキジバトを隠しながら自分の部屋へ走っていった。

「 元気にみえるんだけど」

という母のつぶやきは聞こえなかった。

やよいは部屋に入ると、すぐにキジバトに駆け寄った。

「どういふ事が説明してよ!!」

「説明しろと言われてもなあ。お前の背中にしがみついたことか?それ以外はお前が勝手にやってんで?」

「手当のこと?」

「これのどこが手当やねん!!羽動かされへんやん!!っーか手当やったんや!!」

たしかにこれでは動きたくても動けない。

「ちよつと!そこまで言わなくてもいいじゃない!!一応助けてやっただから!!」

「何でもええからはよこの包帯ほどいてくれ!!このままやったらなんもできん。」

「わかったわよ。」

やよいはそういつて、包帯をはさみで切った。

「はあ。やつと自由や。」

キジバトはうれしそうに呟いた。やよいは少し腹が立ったらしい。むすつとして

「じゃあ、早く説明してよ!!」

と、きつい口調で言った。

「へいへい。ちゃんと説明するから、ちいと待ち。」

そうキジバトが言い終わると同時に、キジバトの体が光り出した。

「えええ!!?何!!?どうしたの!!?」

やよいが焦っているうちに、光はすつと消えていった。

そして、そこにはキジバトの姿はなく、かわりに一人の20歳ぐらいの青年が立っていた。

「えええええええ!!?!!?どうなってんの!!?キジバトじゃないの!!?」

最早やよいはパニック状態だった。

「俺は妖魔の雉ちゅうもんや。ちなみにこつちが本当の姿やで。まあよろしゅうな。」

「妖魔　？」

「まあ、お前らが言う、いわゆる“妖怪”やな。」

「ちょっと待つてよ！！わたしは煮ても焼いてもおいしくないわよ！！！！」

慌ててやよいはそう言った。

「別に殺そうとか喰おうとかそないな気はないねんけど。」

「じゃあ何しようつてのよ！！」

「お前との契約を破棄したいだけや。」

「契約　？契約つて？しかもわたしとの契約つて　！？！？！！？」

もうやよいには訳が分からなかった。

第一妖怪がいるなんて全く信じてなかったので、夢ではないのかとも思っようになってきた。

「おれがキジバトのとき、お前は俺を包帯でぐるぐる巻きにしたやろ！？」

「だから手当だつて！！」

「そのあと、このペンダントを俺にかけ、そして俺の名前を呼んだ。」

「　！？」

何が言いたいのかさっぱり分からなかった。

「実はなあ、人間が妖魔と契約するには、人間が何か身につけてるものと同じ形のを契約したい妖魔の同じところにつけ、そして

人間がその妖魔の名前を呼ぶことが条件やねん。お前、俺に今言ったことやったやろ？」

そういうば、色違いだが、たしかに形の同じペンダントを彼の首に  
つけた。

「でも、わたしあんたの名前なんて知らなかったし、言っていないわよ！」

「でもお前言ったやろ？ “キジバト” って。俺の名前は “キジ” やから。」

たしかにやよいは雉って言った。

よって、やよいが勝手に雉と契約してしまったことになる。

「ええええええええええええ！？！？！？じゃあわたしどうなんのよー！？」

「せやから契約を破棄する方法を探したいから、お前も手伝え。」

「何でわたしもやらないといけないの!？」

やよいは納得がいかなかった。だが、その態度が雉の怒りにふれたらしい。

「お前が勝手に俺と契約したんやろうが！！！！責任持つのは常識やろ！？」

「なによ！！元といえばあんたがこんな紛らわしい名前なのがいけないのよ！！！」

「なんやとお!？」

「なによ!!」

ついに口げんかが始まった。

「 お姉ちゃん どうしたんだろ  
二人の怒鳴り声は、一階まで聞こえたらしい。  
」

「 あゝもう!! なんなのよこのクソ雉!!!!!!  
その日は、やよいの大声がやまなかったとか。」

## 変わる朝

気づけばもう朝だった。

「あれ　？　わたしいつの間に寝ちゃったんだろ　？」

ふと、時計を見ようとすると、そこには  
堂々と雉が寝ていた。

「　　な　　なんであんたがこんなところで寝てんのよー！！  
！」

「　　なんやねん　　朝っぱらからうるさいのお　　。」  
雉はゆつくりと目を覚ました。どうやらなかなか口論に終止符がうたれなかったらしい。うつすらと目に隈ができている。

「お前とぎやーぎやーさわいどったうちに寝てもうたんやろ。」  
雉はあくびをしながらそう答えた。そうとう眠いらしい。

だが、やよいはそんなことは無視して言った。

「いったいいつまでここにいるのよ！！契約を破棄する方法を探  
んでしょ？」

「それができるんやったらとっくの昔にやっとなるがな。」

「　　どういうこと？」

やよいはおそろおそろ聞いた。なんだかいやな予感がする。

「一度契約したら契約したものの同士は30M以上離れることができ  
んのや。」

「なにそれ！？！？そんなの初耳だよ！？？」

やよいのいやな予感が的中した。

「お前がなんか力持ったとったら少しは変わってくるねんけど  
見たところこれといったものはないしなあ。」

「じゃあ、わたし学校どうすれば　　あ、そういえば　　」  
やよいはふと思い出したように時計を見た。



時計の針は、7時30分を指していた。

「やば〜っ！……遅刻する……！」

そう叫んだ瞬間、ドアをノックする音が聞こえた。

「お姉ちゃん？入るよ。」

その声は妹だった。

「やば……！雉……早く隠れて……！」

「えええ！？！？」

「お姉ちゃん。何やってたの？」

やよいは雉をクローゼットの中にほり込んだ。

どうやら、妹には、クローゼットを勢いよく閉める姉の姿しか見えなかったようだ。

「いや その 今起きたところで 急いでたからついあはは。」

「今日は早く行かなくていいの？」

「き 今日はいいの……！今から着替えるから、先に下にいったて……！」

「変なお姉ちゃん。」  
そういつて、静かにドアを閉めた。

「もう出てもええか？」

「着替えるからもう少しそこにいて。」

そういつてやよいは1分ぐらいで制服に着替えた。

「雉。もう出てきてもいいよ。」

そう言われたので、雉はそっと出てきた。

「それよりあんだ、学校までついてくるつもり？」

「契約してもうたからしゃーないやろ。鳩になってお前の近くにあ

る電線にでも止まっとくわ。」

「授業の邪魔とかは一切しないでよ!!」

「んなことするわけないやん。特にお前になんか。」

「なによ! どういうこと!？」

またけんかが始まりそうになった。だがそのとき、

「やよい! 早くしないと遅刻するわよ!!」

という母の声がしたので、やよいは雉を睨みながらも下へとおりていった。

「ねえ、お姉ちゃん。昨日何かあったの？」

食事中、いきなり核心に触れるようなことを妹に問われ、やよいは食べていた焼き魚をのどに詰まらせた。

「ごほごほ!! な 何もないよ?」

やよいは何とかごまかそうとした。

だが、すみれは一步も退かない。

「何もなかったら、いきなりぎゃーぎゃー騒がないよね?」

「う あ! もう学校行かなきゃ!! ごちそうさま!!」

「あ、ちよつと! お姉ちゃん!!」

「やよい!」

やよいは、食べかけのものを台所に持っていくと、急いで鞆を取りに部屋へ向かった。

二人の声が聞こえたが、やよいは無視して部屋に行き、鞆を持って走りながら玄関を出た。

「いつてきまゝす!!」

慌ててそう言っ、逃げるように走った。

「お姉ちゃん　ますます怪しい。」

「ああもう最悪！！なんで朝からこんなに焦らないといけないのよ！！」

「それは自業自得やで。」

「うわあ！！脅かさないでよ！！」

ぶつぶつと呟いていると、いつの間にか雉が目の前にいた。突然だったので、やよいは尻餅をつきそうになった。

「って、人間の姿でついてくるつもりなの！？」

「ちやうちやう。俺は、昨日倒れとったところまでいったらキジバトになるつもりや。」

そう言っているうちに、雉が倒れていたところに着いた。

そこには先客がいた。

ワンピースを着た長髪の、やよいと同じ年ぐらいの少女だった。

「あれ　？　誰がいる。」

「　　やっぱ見えるんか　。」

やよいは今の雉の言葉の意味がわからなかった。

何のことか聞こうと雉の方を見ると、雉は鋭い目で前に立っている少女を睨んでいた。

ふと、前に立っている少女がこっちを見て、そつと口を開いた。  
「やよい。」

少女はそう言つて微笑んだ。

「嘘 かすみ姉！？なんで !？」

やよいの目は驚きの色しか映さなかった。

そつ、やよいの姉、かすみは、3年前に死んだはずだから。



## 崩れる日常

「ど　　どうして　　かすみ姉は死んだはずじゃ　　!?」  
なぜ、死んだはずの姉がここにいるのか。やよいには全く分からなかった。

死んだはずの姉　　かすみはこう言った。

「ずっとあなたを見ていたわ。やっと気づいてくれたのね。」

「かすみ姉　　『おい!! そいつから離れる!!』　　!?」

急に雉が怒鳴ったと思うと、やよいは雉に思いつきり引っぱられた。

「雉!?!」

「平気か!?!」

「　　!?!う　　うん　　。」

やよいはそう言つと、そつと雉を見た。

「よし。せやつたらさつさと逃げるで!?!」

雉がそう言つた瞬間、雉と雉に抱えられているやよいは光に包まれて、その場から消えた。

一人ぽつんと残つたかすみは、

「　　逃がさない　　。」

そう呟いて、くすくすと笑つた。

そのころ、雉とやよいは学校の近くの路地にワープしてきた。

「つてて。おい、大丈夫か？」

「だ　大丈夫。て、あんたいつたい何したの！？」

「ここまで力使って移動したんや。」

「そんなことできるの！？」

「それより、さっきの幽霊はほんまにお前の姉なんか？」

やよいはさっきのことを思い出した。

姿も声も、明らかにかすみだった。

「かすみ姉は、3年前に自殺したの。ちょうど今のわたしぐらいの時に。原因はたぶん彼氏といざこざがあったからそれだって事になつてる。」

「　さやか。　とにかく今日は氣イつけた方がええ。たぶんまた来るやろうから。」

「ちょ　ちよっと待ってよ！それってどういう」

「学校とやらがもうすぐ始まるんやないんか？」

ふと時計を見ると、もう時間がほとんどなかった。

「　あああ！！ほんとだやつばー！！じゃあ雉！いらないことしないでよ！！」

やよいはそういうと、超特急で走っていった。

「　やれやれ。」

そういうと雉は人間からキジバトに姿を変え、やよいの後に続いた。

キンコンカーンコン

「な 何とか間に合った。」

やよいはギリギリサーフで教室に滑り込んだ。

「おはようやよい。今日は遅かったね。」

声をかけてきたのは絵里という、やよいの友達だった。

「おはよ。」

「今日生徒会の集まりなかったの？」

「わかんない あははははははは。」

絵里は首を傾げたが、深くは追求しなかった。

そうしている間に教師が来て、授業が始まった。

（今朝のは かすみ姉 ）

授業に集中しなければならぬとは思っていても、つい思考がそっちに回ってしまった。



結局、ほとんど授業に集中できないまま昼を迎えた。

「ああ さっぱりわかんない。」

「まあまあ。その気を落とさないで。一緒にお昼屋上で食べようよ！」

「そうだよな。ありがとう絵里。」

二人は屋上へ向かった。

「ねえ、やよい。あのキジバト何してるのかな？」

絵里の言葉にぎょつとして、やよいは慌てて絵里の向いてる方向を見た。

さつきからずっとガラスをくちばしでたたいている。

「あんのクソキジバト……！」

「ど　　どうかしたの　　！？」

絵里が驚いてこちらを見ているので、やよいは慌てて

「あ、いや　　ごめん先に屋上いっというて！忘れ物しちゃって！ね？」

と言い、絵里を先に屋上に行かせようとした。

「わかった。じゃあ、先に行ってるから、なるべく早く来てね。」

そう言って、絵里は階段を上っていった。

「雉！！あんた何やってんの！！！！！！」

「しゃーないやん！人間の姿なったらあかんのやろ？」

「だから、学校でさつきみたいなのわけのわからないことしないでよ！！」

やよいは怒って言った。

「用がないならもう行くわよ。」

「今朝のやつがかなり近くに来とる。せやから用心しとけよ。」

「！？それってどういう」

そう言った瞬間、

「キヤアアアアア！！」

上から、そんな叫び声が聞こえた。

「この声　絵里！！！！」

「お　おい！！ちよー待て！！」

雉の言葉を無視して、やよいは屋上に向かって走り出した。

階段を駆け上り、屋上のドアに手をかけ、やよいは勢いよくそのドアを開けた。

「絵里！！」

そこには、倒れている絵里と、死んだはずの姉が立っていた。

「絵里！！しっかりして！！絵里！！」

やよいは絵里に駆け寄った。絵里は気絶しているだけだった。

「やよい！遅かったじゃない！ずっと待ってたのよ。」

「かすみ姉　これはかすみ姉がやったの　？」

やよいはかすみに問いかけた。かすみは、

「そうよ。やよい以外には用はないもの。」

そう笑いながら言った。

「何で　何でこんなことするの！？かすみ姉は優しくなかったじゃん！！」

やよいの言葉に、今までかすみが浮かべていた笑みがすっと消えた。

「じゃあやよいこそ、どうして今までわたしを見てくれなかったの？3年前から、ずっと毎日会っているのに！！」

「　！？」

そのときのやよいには意味が分からなかった。

そんなやよいを見て、かすみはだんだんと本性を現してきた。

「　　そうよね　やよいも、わたしのこと嫌いだったのね　　だ

からずっと無視し続けて　　」

「　！？ち　違うよー！！」

やよいはそう言ったが、かすみは聞こうとしない。

「　　自分は幸せだから　　わたしのことなんかどうでもよかったのね　　素敵な彼氏までつくって　　許せない　　」

「ちよつと待って！！違うよー！！しかも素敵な彼氏って誰のこと！

？まさか　雉は違うからー！！」

やよいは別の意味で焦っていた。

そんなやよいを見て、かすみは

「許せない　やよいなんて　　死んでしまえばいいのよ！」

と言った。

そう言った瞬間、やよいに向かって黒い突風が吹いた。

「うわあああ！！」

やよいの体は空中に浮いた。そして、屋上のフェンスを越えた。

「　　え　　！？」

「あなたも、わたしと同じように死になさい。」

すみれがそう言つと、やよいの体は、下に向かつて落ちていった。

## 空の決闘

黒い風に飛ばされて、やよいは地面に向かってものすごいスピードで落ちていた。

（嘘 わたし こんなところで死ぬのかな ）  
そう思って、やよいは目を閉じた。

急に軽い衝撃が来たかと思うと、体が軽くなった。  
そっと目を開けると、なんと宙に浮いている。  
そして目の前には

「 ！？き 雉！？ 」

「 ふう。なんとか間に合ったみたいやなあ。 」

雉は人間の姿で、背中には翼が生えていた。

「 ど どうして翼が！？ 」

「とりあえず、どっかに降りるで。」  
雉はそう言って、高度を下げていった。

雉とやよいは、校庭の裏にある、大きな木の近くに降りた。  
「大丈夫か？」

雉はそう言って、やよいの顔をのぞき込んだ。

突然だったのでやよいは至近距離で雉と目が合い、慌てて離れて

「だ　大丈夫！！」

と、真っ赤になって言った。

雉はぽかんとしながら「さよか。」とだけ答えていた。

（な　なんで雉なんか赤面すんのよ！！あんな変な妖怪に！！）  
気持ちを落ち着かせようと、やよいは必死になっていた。  
だが、

「おい、来るで。」

と言う雉の言葉で、それどころではなくなった。

「どうしてやよいを助けたの？あなた、人間じゃないくせに。そっ  
か、あなたがやよいの彼氏だから？」  
かすみは勝手に話を進めはじめた。

雉はただじつとかすみを見ていたが、何か思いついたようだ。

「かすみ姉！こいつとは何にも 『ああ。お前の言う通りや。』

って何言いつてんのよ！？！？ちよつと雉！？」

慌てるやよいに、雉は小さく耳打ちした。

「ええから俺に合わせる！もしかしたら助けられるかもしれん！」

「ええ！？ほんと！？」

「アホ！！声でかいわ！！」

多少まるぎこえのような会話をして、雉はかすみの方を見た。

「そう。いいわねやよいは。幸せで！！！」

かすみがそう言った瞬間、かすみの体は黒い風に覆われた。

「みんなみんな、死んでしまえ！！」

そう言つて、やよいに向かつて飛び込んできた。

「うわああ！！」

やよいは身構えたが、不思議と衝撃はなかった。

雉が力を使つたらしい。

「平気か？」

「大丈夫。」

その様子を見ていたかすみは、

「許さない。」

そういつて、さらにどす黒い風に包まれていった。

「かすみ姉

なんで

わたしを殺そうとするんだろう

」

その問いには雉が静かに答えた。

「おそらく あの子は自分とお前を重ね、照らし合っているんやろ。自分は不幸があつたのに、妹はちゃんとした彼氏もいて幸せそう。だから憎い。そういうこととちゃうか？」

「って、なんでわたしの彼氏って事にしたのよ!!」

「そうしたら、逆上して負のエネルギーが出てくるやる?その時に負のエネルギーを取り除けば、元に戻るかもしれんからな。」

「そんなことできるんだ。雉って何者!？」

「だから妖魔や言つとるやん。」

雉の考えにやよいは驚いた。

だが、驚いている暇はない。かすみが先ほどより黒い風を纏ってこちらに向かってきた。

「悪い。やよい、ちよつとこっちこい!」

「ええええ!?!?!」

突然引っぱられたかと思うと、やよいの体はすっぽりと雉の腕に収まっていた。

「そんなに一緒にいたいなら、二人まとめて殺してやる!!」

先ほどよりも逆上したかすみは、そう言って攻撃しようとした。しかし

「はっ。殺せるもんなら」

雉の手は、見えない何かをしっかりと握った。

そして、かすみに向かって

「殺してみろや!!」

思いつき振り下ろした。



「ぐわあああああ！！！！」  
その瞬間、かすみが纏っていた黒い風が吹き飛び、光で何も見えなくなつた。

「　　どう　なつたの！？」

やよいはだんだん見えてきた視界の中で、必死に姉を捜した。

すると、光の中から優しい笑顔がふと見えた。

「やよい。ありがとう。」

「かすみ姉！！」

どうやら、正気に戻つたらしい。

「ほんとにごめんね。怖い目に遭わせてしまつて。」

そう言つて、かすみは静かに雉の方を見た。

「ありがとうございました。後はお願いします。」

「もう、ええんか？」

「はい。ちゃんと罪は償わないと。」

「ちよつと待つて！！罪つて何なの！！？」

やよいの問いに、雉ではなくかすみが答えた。

「生きている人間を殺すと罰を受けるの。たとえ未遂であつてもね。」

「そ　そんな」

「だが、罪を償えばちゃんと天国へ行ける。」

雉の言葉を聞いたやよいは、はつと顔を上げた。

かすみは幸せそうに微笑んでいる。

「じゃあ、そろそろ行くわ。」

そう言つと、足の方がだんだん薄くなつていった。

「かすみ姉！！」

やよいは涙をためてそう叫んだ。

「雉さん。やよいのこと頼みます。」

雉は何も言わず、そつと頷いた。

「やよい。幸せになつてね。」

そう言つと、かすみは光となつて消えていった。

「よかった。ちゃんと元に戻って。  
やよいは少し泣きながらそういった。  
「そうやな。」

二人の間を、やさしい風が通り抜けた。  
。

## 崩れる日常NO・2

消えていったかすみを見送り、二人はしばらくその場でじっとして  
いた。

「あああああ！！！しまった！！！絵里のこと忘れてた！  
！！！！」

「絵里って　上で気絶してた子の事か？」

「どうしよう！！早く戻らないと！！」

やよいは焦って階段に向かおうとした。

だが、雉の手によって塞がれてしまった。

「ちよつと雉！！何のつもり」

そう言った瞬間、やよいは雉に抱きかかえられた。

「こつちの方が早いやる。しっかりつかまっとけよ！！」

「ええええ！？！？！／／／」

雉は、やよいを抱えたまま飛び上がった。

ちよつどそのころ、

「あ　あれ？わたし　何でこんなところで　？そう  
いえばやよいは！？」

絵里は目を覚ましたらしい。

辺りを見渡したが、それらしい人影はなかった。

「いったいどこ行っただろ　あ！ひよつとして下にいるかも！

「！

ふと、絵里は思いついたようにフェンス越しに下を見ようとした。

そのとき、

ちょうど雉と雉に抱えられたやよいが屋上に到着した。

無論、絵里はその決定的瞬間をしっかりと見たのである。

「ええええええええええ！？！？や

やよいだよね！？！？っという

か横の人誰！？！？なんで羽生えてるの！？！？！？」

絵里はパニック状態だった。だがやよいの方も、

「ゝ！？やば！！ちよつとどうすんのよ雉！！思いつき見られたじゃん！！！！」

「んなこと俺に言われても！！つーかお前がはよ屋上行きたい言うから飛んでやったんやで！？」

「なによ！！わたしが悪いってわけ！？」

「当たり前やんか！！自業自得や！！」

「何ですって！？」

「なんやねん！！」

こっちはこっちでけんかが始まった。

しかし、すぐに終止符を打たれた。

「ねえやよい！！その人誰なの！？！？」

「ええええ！？！？そ　その　」

何とかごまかそうとしたが、なかなか思いつかない。

絵里はそんなやよいの行動を見て、

「まさか　まさかサーカス団の彼氏！？」

思いつき勘違いをした。絵里は相当の天然らしい。

「んなわけないじゃん！！！！！！」

やよいもさすがに今の絵里のボケには驚いた。

ぶつちやけ、天然過ぎにも程がある。

絵里はそんなやよいを無視して、ぽかんとしている雉を見た。

「やよいとつき合ってるんですか！？」

「いや、やよいとは不本意にも契や　『何言ってるのよこのアホ

ボケキジバト！！』　な　なんやとお！？」

「やよいって呼び捨てなんだ　！！なんか怪しい！！」

絵里はますます変な方向に思考を巡らせていった。

「だから違うんだって！！」

やよいは抗議したが、

キンコーンカーンコーン

予鈴が鳴ってしまったので、ちゃんと抗議できなかった。

「じゃ、とりあえず俺は鳩の姿になつとくで。」

「もうやだ」

それから授業中は、絵里からずっと質問攻めだったらしい。

授業が終わると、やよいは超特急で家に向かった。

本当は生徒会の仕事があるのだが、絵里から少しでも早く逃げるほうに必死でそんなことはすっかり忘れていた。

「ああもう！！今日は最悪じゃん！！」  
かすみ姉には会えたけど。」



小さく呟いた声は、近くを飛んでいた雉にしか聞こえなかった。

「ただいま!!!」

やよいは家に帰るなり、すぐに自分の部屋へ飛び込んだ。  
だが、入った瞬間、

「うわああああああ!!!」

やよいは大きな悲鳴を上げた。  
それもそのはず。部屋に入った瞬間、知らないおじいさんがいたからだ。

いや、おじいさんの霊だった。

「ちょっと!!!どうなってるの!?!」

慌てて後ろからついてきていた雉に聞いた。

「まあ、ちょっと待つとれ。」

雉はそう言っで、人間の姿になり、そつとそのおじいさんの霊に触れた。

すると、おじいさんの霊はすつと音もなく消えていった。

「え　！？な　何をしたの！？っていうかさっきのじいさんは何だったの！？」

「さっきのはじいさんの霊や。俺はその霊を成仏させただけやで。」

「れ　靈！？わたし今まで靈感なんかなかったのに！！」

「それは俺と契約したからとちゃうかなあ。」

「ええええええええええ！？！？！？」

雉の答えに、やよいは相当驚いた。

（それじゃあ、これからずっとこんな感じなわけ！？）

そのことばかりで、扉の向こうから近づく音に気づかなかった。

「ちょっとお姉ちゃん！！うるさいんだけど！？」

突然、妹がノックもなしにやよいの部屋へ入ってきた。

もちろん、雉は隠れそこなつた。

「お姉ちゃん　その男の人　誰!？」  
妹の厳しい視線がやよいに向けられた。

(なんでこうなるのよー!! だれかー助けてえー!!!!!!)

やよいの心の叫びは、誰にも聞こえなかった。

## 追求 ごまかし 後の祭り

現在、一階のテーブルの周りにあるイスにはすみれ、そしてそれに向かい合うようにやよいと雉が座っている。

そして、すみれからは厳しい視線が突きつけられていた。

「雉の馬鹿！！どうしてもっと早く隠れなかったのよ！！っていうかなんであんなこと言おうとしたの！？」

「しゃーないやん！！話に夢中で気づかんかったし。それに俺は正直者やねん！！」

「誇らしげに言うな！！」

さっきからそんな小言ばかり言い合っている。

「じゃ、そろそろ説明してもらおうかな。」  
妹の容赦ない追求が始まった。

「それじゃあまず!!」

すみれは雉を指さした。

「あんた誰？」

「俺は雉っちゅう者や。」

「じゃあ、お姉ちゃんの何？」

いきなり超特急と真ん中の質問が突きつけられた。雉はあつけにとられ、何も言えなかった。

「馬鹿雉!! 何で何にも言わないのよ!!」

「んなこと言うたって、何言えええかなんてわかるかい!!」  
またひそひそ話が始まった。

「相当仲がいいんだね。」

すみれの容赦のない指摘がきた。

そして、今度はやよいを指さし

「お姉ちゃん。やっぱつき合ってるんでしょ？」

またまた超特急と真ん中な質問が突きつけられた。

「違う!! 絶対に違うから!!」

やよいは慌ててそう言った。

だが、すみれには逆効果だったらしい。

「やっぱり怪しい!!」

「なあ、やよい。」

「何？」

「ほんまの事言った方がええんとちゃうか？」

「」



やよいと雉が契約したところが、すみれには相当おもしろかったらしい。

すみれは笑い過ぎて、少し引つけた。

「いやゝごめんごめん。あんまりにもおもしろかったから。まあ、だいたい分かった。それで」

すみれは雉の方を見た。

「雉さんって、いったい何者？そしてどこから来たの？」

雉はその質問に、少し表情を曇らせた。

「俺はただの妖魔や。人間でもないし　　魔物でもない　　。だから、時代を超えてここに来たんや　　。」

「え　　？」

これはやよいも初耳だった。

「俺は、最初は江戸におったんや。そこで死んで　一回未来である現世に来て　それから今で言う平安にいつて　また現世に戻ってきたんやろうな。」

「それって　タイムスリップ！？っていつか一度ここに来たことあるの！？」

「そんな長い事やないけどな。」

「へえゝ　　。大変だったんだ　雉さんって。」

「まあ、終わった事気にしても何も始まんけどな。」  
そういつて雉は笑った。

だが、やよいには雉が無理しているようにしか見えなかった。

そんなことを知ってか知らずかすみれは

「ねえ、雉さんとお姉ちゃんって離れられないんでしょ？隠れるのも大変だろうし、ちょうどいいアイデアを思いついたんだけど！！」  
「え！？」

二人の声が重なった。

「まあ、わたしに任せなさい！！」

妹の自信ありの顔に、二人はただただ流されていった　　。





## 対面式？

「いけるの？」

「大丈夫！！雉さんだつてそっちの方がいいでしょ？」

「まあ、隠れんでええのはありがたいけどなあ。」

「なら、ノープロブレムだね！！」

「やよい、雉、すみれの三人は作戦会議（？）をしていた。

「なんだから、やよいと雉は完全にすみれのペースに乗せられたようだが。」

「そのとき、

「ただいま。」

「買い物に行っていた母が帰ってきた。

「うわゝもう帰って来ちゃったよ！！ほんとにやるの！？」

「あつたり前じゃん！！雉さん！ちゃんとやってよ！！」

「へいへい。」

「そしてすぐに、下から母の声が聞こえた。

「やよいゝ、すみれゝ。ちよつと来てゝ！！」

「はい！！じゃ、いつくよ！！」

「。」

「すみれがひよっこりとリビングに顔をのぞかせた。それを見た母は

「今日はスイカが安かったから買ってきたわよ  
と言いかけて、硬直した。」

「ど　　どうも。」

雉は静かにそう母に言った。

結局、やよいと雉はまたテーブルの周りにあるイスに座っていた。  
ただ、今度はすみれではなく母からの視線が注がれた。

「　あの　、あなたは誰なんですか？」

早速母からの質問がきた。

「雉と言う者で、家庭教師をやつとります。」

この言葉は、すみれからの提案だった。

「じゃあ、やよいの家庭教師を　？」

「ええ。彼女から頼まれて。」

やよいはあからさまにいやそうな顔をした。

だが、運良く母は見てなかったらしい。

「おい。」

「だって！わたしが雉より立場が下だなんて！！」

「つて、お前のほうが上なんかよ！！」

「あつたり前じゃん！！そうでなくてもせめて対等でしょ！？」

「俺が知るかアア！！」

だんだん声が大きくなって、最後らへんは丸聞こえだった。

「ひよつとして、やよいは雉さんと知り合いなの？」

今度はやよいに質問が来た。

「ええつと」

やよいはどう言ったらいいかわからず、詰まってしまった。

ふとすみれの方を見ると、すぐに

「雉さんは、お姉ちゃんの友達の家庭教師をしてたんだつて。で、  
たまたまその子のお姉ちゃんが遊びに行ったときに会ったんだつて。」

「そうなの？」

母は完璧にすみれの話信じたらしい。

「うん。そんな感じ。」

やよいはそう答えた。

「やよいの家庭教師をしてもらうのは全然かまわないし、逆にありがたんだけど、お金はどのくらいかかるんですか？」

母はおそろおそろ雉に聞いた。

「別に　　　　　いりませんよ　　　　？」（雉は分かってない）

「ええ！！いないんですか！？」

「まあ、別に　　。」

「ありがとうございます！！！！」

何かトントントン拍子に会話が進んでいつて、どうやらいい方向に向かっ  
たらしい。

「やよい！よかったじゃない！！こんないい人に見てもらえるなら  
！！」

「

」

（ お母さん

だまされてるよ

）

結局、雉はあっさりとやよいの家庭教師ということになった。

それから10分後

やよいの部屋で、

「ところで雉って勉強教えられるの？」

やよいからの質問があつた。

「んなもん俺ができるわけないやろぅが!!」

「ちよつと待つてよ!!じゃあどうすんの!!ばれたらやばいじゃん!!」

「しゃーないやんか!!すみれがああ言えっというから。」

「こんのポケクソアホ雉!!」

「なんやとお!?!」

飽きないのかまたまた口論が始まつた。

「すみれ。本当に雉さんとやよい仲良しね。」

「そうだね(笑)」

「あああああああああああああ！……生徒会の仕事すっかり忘れてた……！」

「あゝほ……ばか……！」

「あんたには言われたくないわよ……！」

「なんやとお！？ちよつと一発殴つたるか！？」

「やれるもんならやってみなさいよ……！」

「上等やコラア……！」

今日も前原家は騒がしかったとか。





## あわただしくて悲惨な朝

「いつてきまゝす!!」

やよいはそう言つて家を飛び出した。

普段とはそんなに変わらない。

だが、変わったと言えば

「おい。何をそんなに急いどるんや？」

彼 雉の存在だった。

一昨日出会つてとばつちりで契約してしまい、昨日は死んだはずの姉に会つたり、友達や家族に誤解されたり。

とにかく彼と会つてから、ろくな目にあつていない。

「うるさい!! 昨日生徒会の集まり行くの忘れてたから、仕事が多つてんの!! たぶん!!」

やよいはぶつきらばうに言い放つた。

「お前、結構大変やねなあ。」

「そう思うなら昨日の瞬間移動やつてよ!!」

「昨日力使いすぎたんや。せやから無理。残念でした。」

「こんの役立たず!!」

「なんやとお!!? お前と違つて力使えるねんで!？」

もはやお約束になつてしまつたけんかが始まつた。が、学校が見えたのですぐに終わった。

「じゃあ雉! いらないうことしないでよ!!」

「へいへい。わかつとるわ。」

そう言つて、やよいは生徒会室に向かつて走つていった。

やよいは生徒会室のドアを勢いよく開けた。

「し　失礼します　。（息切れ）」

「あ、おはよう前原さん。」

「会長！……！」

やよいに声をかけたのは生徒会会長の朝倉恭祐。

さわやかでかつこよく、人気がある生徒で、やよいの憧れの人でもある。

「昨日はどうしたの？ひょっとして一昨日遅くまで残って仕事やってたせい？」

「い　いえ！！違うんです！！……その　昨日はちょっといろいろあって　。」

「そっか。一応仕事は代わりにやっといいたから。」

「あ　ありがとうございます！！……！」

やよいは笑顔でそう言った。

「やっぱり雉とは違うなあ……。さすが会長！！……！」

と、心の中で思ったそのとき、

「あらゝ前原さん。私も手伝ってあげたのに私には何も言ってくれないんですのゝ?」

彼女は林 満里奈といって、やよいと同じ生徒会の広報総務で同じく1年生である。

ただ、お嬢様育ちなのでかなり生意気だ。(やよい説)

「へえゝ。いつもいっつも仕事をわたしに押しつけておいて、少し仕事したら礼を言えって?」

「いつもあなたが勝手に私の仕事をやってるんじゃないやありませんの!」

「んなわけないでしょ!!会長!!ちょっとこれどう思います?」

「まあ!!自分が不利になったと思ったら会長にたよるんですか?」

「なんですって!?!」

二人は犬猿の仲で、いつもけんかしている。

まるで雉とやよいみたいに。

「まあまあ二人とも落ち着いて。二人で仲良くやったらきつと早く終わるよ!」

会長が笑顔でそう言うので、二人はしぶしぶ従った。

「あ、そろそろ僕行かないと。後はよろしくね。」

「はい!!!」

二人はそう言った後、にらみ合った。

会長はそんなことは知らず、笑顔で生徒会室を出て行った。

「ああもう!!なんでこんな人が同じ広報総務なんですの!?!ありえませんか!?!」

「うるさい!!わたしはただ生徒会の仕事をやりたかっただけなの!!!」

さつきから同じような会話が続けている。

しかし、急に空気が変わった。      ような気がした。

「ねえ、何か      変じゃない      ?」

「変なのはあなたの頭じゃないんですの?」

「ああもういい!!」

やよいはそう言っただけで生徒会室を飛び出した。

「ちよつと!!前原さん!」

満里奈の叫び声が聞こえたが、無視して走った。

校舎の隅の木が茂っているところに行くと、そこには人間の姿の雉が立っていた。

「雉!何かあったの?」

「      少し面倒なことになりそうや      」。      」

「それってどういう      」

「やよいは気にせずに授業受けとけ。俺一人で何とかする。」

雉はそう言って飛び立とうとしたが、やよいに阻止された。

「ちよつと!!!どういふことかちゃんと説明しなさいよ!!」

「      この学校のどこからまがまがしい力を感じるんや。」

「何で!?!ひよつとして何かいるの?」

「たぶんそうやろうな。お前みたいに靈感強そうな奴ここには結構いるみたいやし。」

雉はそう言つて、手を前に出した。  
やよいが何をしているのか聞こうとした瞬間、雉の手が青白く光り出した。

そして、光が消えた時、

「さっきお前がいたところから気配がする。。」  
と、雉は言つた。

「ちよつと待つて！それつて あいつが危ないんじゃない？」  
やよいは満里奈のことを思い出し、慌てて走ろうとした。が、

「こつちの方が早い！」

そう言つて雉はやよいを抱きかかえて飛び立つた。

「なによ！力使えるじゃない！！」

「」

雉は何も答えなかった。

「全く 前原さんつたら！！」

満里奈は何も知らず、生徒会室でお茶を飲んでいた。（仕事しろよ

！)

しかしそのとき、生徒会室の窓ガラスが突然割れた。

「きゃあああああ！！な　なんなの！！？」

満里奈には見えていなかった。そこにはまがましい力を放った悪霊が。

「　お前の体　もらい受けるぞ　」

満里奈は、そんな声が聞こえたかと思つた瞬間、悪霊に取り憑かれた。

「満里奈！！大丈夫！？」

やよいと雉が来たのはちょうどそのときだった。

「満里奈！」

「離れろ！！！」

雉がそう言つた瞬間、満里奈から先ほどよりも強くて毒々しい力がでていた。

「　ふふふ　これで　わたしは自由だ！！後は　」

満里奈に取り憑いた悪霊は雉を見た。

「お前を殺せば　もうわたしの邪魔をする奴はいない！！」

「　ち　まだしぶとく残つとつたんかい　」

「雉！？」

「やよい。離れとけ。」

そう言う雉の顔は青ざめていた。

「こいつは　早くやらんと　満里奈っていう子が危ない　」。

「何ですって！？」

「ふふふふふ　ははははははは！！」

満里奈の声で、悪霊は大声で笑った。

## 覚醒（前書き）

少しグロい表現がでていきますので苦手な方は気をつけて。



## 覚醒

「ふははは。さあ、どう料理してやろうかい？」

「ちよっと！！満里奈！！」

やよいは満里奈に向かって怒鳴りつけた。だが

「無駄無駄。今はもうわたしが乗っ取ったからねえ。」

「そいつの言うとおりや。」

「雉？」

なんだか雉の様子が変だ。

さつきからしゃきつとしていない。

「そんなことより、はよせな。」

「ど　どうすればいいの！？」

「んなこと俺がわかるわけないやん！！」

「な　！！なによそれ！！じゃあどうしたらいいかわかんないじゃん！！」

思い違いだったのだろうか？

やよいがそう思ったとき、黒くてまがまがしいオーラを纏ったものがこちらに飛んできた。

「ははははは。死ねえ！！」

「うわああ！！」

「くそつ　！！」

雉はやよいをかばって、なんとか紙一重で相手の攻撃をよけた。

「　　つ　　」

「雉！！」

雉はすでに息が切れていた。やはり何かおかしいとやよいは思った。

「は。どうやらその化け鳩は本調子じゃないみたいねえ。そんなもんかい。」

「そうなの!？」

やよいは慌てて雉の方を見た。だが雉は

「妖魔なめんなや。」

そう言っただけに少しだけ笑みを浮かべた。

しかし、雉の顔はかなり青ざめている。

そうしているうちに、どんどん攻撃が飛んできた。

「ほらほら。もっといくよ!！」

無差別に攻撃が飛んでくる。

雉はやよいを抱えながらなんとかかわしていた。

「つち。ちょこまかちょこまか。」

そう満里奈に取り憑いた悪霊が言った瞬間、

「おい!何があつたんだ!！」

という声とともに、生徒会の担当の先生が入ろうとした。

「せ　先生!？」

「前原!それに林も!お前らいたいここで何しているんだ!

!　!!は!!その男!!何者だ!!さてはお前が。」

「ち　違うんです!!雉は。」

「ふん。ゴミどもが。」

やよいが言おうとした瞬間、悪霊はその先生に向かって攻撃を放った。

「う　うわあああああ!！」

「だめ!!!!」

やよいがそう言った瞬間、大きな爆発が起こった。

だが、煙がはれたとき、先生はほとんど無傷だった。

だが  
その代わりに

「くそ、血まみれの雉の姿があつた。」

「うそ！！雉！！！！！」

やよいは目に涙をためて雉の元へ走った。

「馬鹿！！人助けて自分がこんな事になるなんて！！」

倒れた雉をやよいは慌てて体を起こそうとした。

「う  
ら  
い  
う  
る  
さ  
い  
わ  
平  
気  
や  
こ  
の

やよいの手には雉の血がべったりとついた。

「あつはっはっはっはっはっはっは！！ほんとに馬鹿だねえ  
 ！！そんな奴ほつといたら、もう少し長生きできたのにねえ！！」  
 そう大声で笑い、もう一度攻撃しようとした。  
 「楽にしてあげるよお！！」

「許さない。」

「やよい？」

雉は細々とそう言った。だが、やよいには聞こえてなかったらしい。

「わたしはお前を絶対に許さない!!!」

「へえ、そうかい。じゃあ死になよ。」

悪霊はやよいに向かつて大きな砲撃を撃った。

「やよい!! 逃げ」  
「雉を こんな目に遭わせて 許さないんだからあああああ!!」

そのとき、やよいの中で何かがはじけた。



## 目覚めた力と気づかぬ心

やよいは敵の攻撃をかわさなかった。

「はははははは！馬鹿だねえ！化け鳩と一緒に死ぬってかい。  
あははははは！」

しかし、煙がはれたそこにはやよいが光を纏って立っていた。

「な　なんだと!？」

「えええ!?!?　なにこれ!?!?どうなってるの!?!?」  
やよいも自分がどうなっているかわからなかった。

「くそ!!今度こそ　死ねえ!!」

「う　うわああ!!」

またやよいに向かって攻撃が飛んできた。今度は5、6発ぐらい。  
やよいはとっさに手を前に出した。  
すると

「ど　どうなってるんだ!?!」

今度はやよいの前に光の壁ができていた。

「これ　どういう事　!?!」

「　　お前　　」

「雉!!大丈夫!?!」

雉の声を聞いて慌てて雉に駆け寄ろうとした。そのとき、

「貴様ああああ!!」

そう言つて満里奈に取り憑いた悪霊はやよいに向かって殴りかかる  
うとした。

だが

「しつこいわよ!」

と言い、やよいは満里奈の体に触れた。

とたんに満里奈の体から黒い煙が上がり始めた。

「ぐ　ぐわああああ!!!!!!」



そして苦しむ満里奈の顔が見えたと思うと、悪霊はすぐに満里奈の体の外へと飛び出した。

すると、満里奈からでていたオーラはすっと消えていった。

「うわー！満里奈！！しっかり！！」

満里奈はぐったりとはしているがちゃんと息はあった。

「お のれ こうなったら あの女に 」

「そうはいかせへんで 。」

雉はそういつて、悪霊に向かって振り上げた腕を思いっきり振り下ろした。

「ぎゃあああああああああああ！！！！」

そんな叫び声を残して、悪霊は消えていった 。

それと同時に雉はその場に倒れた。

「雉！！」

満里奈を机に寝かし、やよいは急いで雉に駆け寄った。

雉の出血はひどく、人間ならまず間違いなく死んでいる。

「しっかりして！！雉！！」

そう言つて雉の体を揺さぶった。

「 い 痛いねん けど 」

雉からそんな弱々しい声が返ってきた。

「雉！！！！ちよつと待って！！救急箱そこにあるから取つて  
「もおええ。」

そう言つと雉はすつと立ち上がった。

「だ　大丈夫なの！？ひどい出血なのに！！」

「お前が俺に触れたとき、痛みが急に和らいでな　。　後は残つ  
とる自分の力で回復したんや　。」

「え　！？わたしが　！？つて、わたしどうしちゃったの  
！？」

やよいは訳がわからずにそう雉に聞いた。だが、いきなり雉に引つ  
ぱられ、気がついたらやよいは雉の腕の中にすっぽりと収まってい  
た。

「ち　ちよつと雉！！／＼／＼何して　」

「やつぱり　翡翠を持つとったか　。」

「　！？ひすい！？」

雉はやよいを解放して、こう言つた。

「宝玉や言つてな、ごつつい力を持った玉があるんや。そのうちの  
一つがお前の体内にあるつちゅうわけや。」

「ええええええええええ！？！？な　なんで！？」

「それはわからんが　ごつついレアやからお前これからねらわ  
れるで。」

「ちよつと待つてよ！！！！そんなこと言われたってわたし戦えな  
いよ！！！！」

慌てるやよいを見て、雉は笑つて  
「ちゃんと守つたるから。」

そう言った。

(／／／／／／！！？？今雉何て　！？)

やよいはめっちゃ赤面して、慌てて雉から目をそらした。

(もう！！何で雉なんかに！！！！／／／)

た力と気づかぬ心

目覚め



## 新たな風

やっとの思いで悪霊をはらったやよいと雉は、もう一つの問題にぶち当たっていた。

「ねえ雉　　これどうしよう　　。」

やよいが言ったこれとは今の生徒会室の状態。はっきり言って壊滅寸前である。

しかも、満里奈や先生のこともある。

「すまんなあ　　。もう力是一个も残ってないんや　　。」

「じゃあ　　」

「どないしようもない。」

「そうあっさりと言わないでよ!!」

「んなこと言うたって　　」

ややおとなしい言い争いをしていたそのとき、

「ん　　。な、なんなんですのこれは!!」

「やば!!雉早く!!」

雉は慌ててキジバトの姿になった。運良く満里奈には鳩になる瞬間は見られなかったらしい。

「ちよつと前原さん!!これはいったいどういうことなんです!!??つて、なぜ鳩がここに!??」

「　　え　　?そ　　それは　　」

やよいは言い詰まった。雉のことを言うわけにはいかないし、でもこの状態をどう言ったらいいかわからなかった。

ふと、満里奈はやよいを見た。

「あら?前原さん。何か光っていませんか?」

「へ?なんのこと?」

「とばけないでください!あなたの服、胸あたりが緑色に光ってい

ますわよ!!」

やよいは実際に確かめてみたが、なんにも見えなかった。  
だが、そのときの雉のつぶやきで顔色を変えた。

「どうやら、透視能力があるみたいやな。あの満里奈っ子。」

「ええ!?じゃあ」

「お前の翡翠を見たんやろうな。」

「ちょっと前原さん!!聞いてますの!?!」

「あ、ごめんごめん　その」

本当のことを言おうとした瞬間、

「コラ!!お前ら!!ちょっと来い!!!!!!!!」

気絶していた先生が目を覚ましてしまった。

「どういうことだ！！なんにも覚えてないっていうのは！！」  
結局、何も知らないということにした。そうしないと後が大変なことになる。

「だから知らないんです。突然爆発して」

「ひよつとしてあのと見えたあの男が犯人か　　！？」

「ち　違います！！あの人は犯人じゃないです！！」

とつさにそう言ってしまった。

「なぜそう言いきれる？」

しまった、とやよいは思った。だが、言ってしまった以上どうしようもない。

「彼はわたしの親戚で、わたしが弁当を忘れたので届けに来てくれたんです。それで巻き込まれて　　わたしを助けてくれたんです。」

」

「じゃあそいつはどこにいるんだ!？」

「警察を呼びに行ってもらいました。」

やよいのとっさの嘘は、どうやらうまくいったらしい。

「つく　まあ今回は大目に見てやる。ただし!!今度こんな事

があったら生徒会は活動禁止だ!!わかったな!!」

「「は　はい　。」」

二人は渋々了承した。



「もう！！いったい何がどうなっているんですの！？って、ちょっと前原さん！？」

「ごめん！！もう予鈴なりそうだから！！じゃね！！」

今話してもたぶん大変なことになるだろうから、後で言おう。そう考えた。

キンコーンカーンコーン

「せー　　せー　　」

結局息切れしながら教室までたどり着いた。絵里の視線が痛かった

が無視して席に座った。

「おはようやよい！って、そんなに警戒しないでよ。」

「ご　ごめんごめん。で、何？」

「なんか今日、転校生が来るんだって。」

「転校生？」

やよいがそう言った瞬間、

「おーい。STするから席に座れ。」

そう言う担任の声とともにある長髪のオレンジ髪で、背の低い男の子が入ってきた。

「はい。転入生を紹介する。名前は風見　琉度君。」

「よろしくお願いします！」

席はやよいの後ろだった。だから琉度が席に着こうとしたとき、目があった。

「よろしく。」

「え　！？」

すぐに琉度は微笑んだが、最初に見せた違和感のある目を、やよいは見逃さなかった。

「ちょっとやよい！！知り合いなの？」

「ううん。」

（なんなの

？あの風見つて子

）

思考がそこから動かなかった。  
。

## 1から100まで不思議な奴

「ねえ、風見君ってどこから来たの？」

「どこ生まれ？」

「ひょっとしてハーフ!？」

先ほどから風見琉度という転入生の周りには女子が集まっている。理由はおそらく、小さくてかわいいことと、容姿であろう。

風見は、橙の長髪をポニーテールにして、さらになぜか包帯のような帽子をかぶっている。

「いつぺんに言われても」

風見は正直困っていた。見た目はただの小さな子供のようにしか見えな

ただ、今言えることは

「思い違いかなあ？」

「何が？」

やよいがそう言った瞬間、目の前に逆さまの風見がいた。

先ほどまで後ろで質問攻めにされていたはずなのに。

「うわあああああああ!!!びっくりした!!!驚かさないでよ!!!」

心臓バクバク状態のやよいは風見に怒鳴りつけた。

「風見君!？何やってるの!？」

そばにいた絵里は驚いている。軽々と天井にあるライトに足を挟んでいるのだから。

「いやあ。ついつい。驚かせたならごめんね。」

そう言っ

て風見は華麗に飛び降りた。周りからおおという声があがっている。



「んなこと俺に言われても。」

昼休み、絵里をほったらかして（おい）屋上に来ていた。  
そこで雉と合流したのである。

「なんか変なのよ。っていうか根本的に違うというか。」

「せやなあ」 そんな奴知り合いにはおらんねんけど

「

（まさか んなわけあらへんか。）

「どうしたの？雉？」

雉が急に黙り込んでしまったので、やよいは少し不安になって雉の顔をのぞき込んだ。

「！！！！な なにしとるねん！！！！／／／」

雉は少し赤くなって慌てて退いた。

やよいにはよくわからなかったらしい。鈍感もほどがありますぜ。

「とにかく、危ないと思ったらその首に掛けてるペンダントを握って力込めればすぐに行くから。」

「そう言えば これとれないの？」

「今更かい。契約してんねんからとれるかい。」

「ちよつと待つてよ！！体育の授業どうしろつての！？」

「知るかあ！！」

「楽しそうだね！」

「「うわあああああ！！！！」」

いきなり音もなく風見がやってきた。

「久しぶり。雉。」

「ええええええ！？！？雉知り合い！？」

「

なんで

あんた

がここにおるんや?」

雉は少しあきれたような声を出した。

それとは裏腹に風見は笑顔で

「そんなこと、面白そうだからに決まってるじゃん!」  
そう言つてやよいの方を見た。

「へえ」。知り合いだったんだ!」

「ど どういうこと?」

「こいつは

雉が何か言おうとした瞬間、

「

」

風見は雉に何か言った。

すると雉は黙ってしまった。

その代わりに

「僕と雉はまあいわゆるマブダチ見たいなかんじ。」  
「はあ

風見は相変わらず笑顔で話していた。

「で、その 雉の正体知ってるの?」

「知ってるよ。僕だって力使えるし!」





「やよい。早く」

「雉は力回復してないんでしょ！？わたしも戦う！！」

「アホ言え！！そんな事したら」

「けんかしてる場合じゃないよ。」

敵はもうすぐ目の前に来ていた。

「もう！！！！日何回来るのよ！！雉！！あんたって疫病神！？」

「んなわけないやろ！！」

「もういい！！あいつら何とかしないと！！」

「無理するんやないで。」

「雉こそ！！」

信頼関係ができた会話をして、敵をにらみつけた。

「翡翠って、けなげだねえ」。雉の奴、えらく面白いのと契約したね。」

この声は一人には届かなかった。



## 裏の裏はやつば裏

「はあく。やよいのやつ、どこ行っちゃったんだろう。」  
置いてきぼりにされた絵里は悲しそうにそう呟いていた。

「今日も何かおかしかったし　　大丈夫かなあ　　？」  
小さな不安が胸をよぎった　　。

そのころ、in屋上。

「こんの野郎おおお！！！」

雉はほとんど力が使えないので、自分の武器をやたら滅多に振り回していた。

「ちよつと雉！！壊れたらまた問題に　　」

「せやかて、いちいちんなこと気にしとつたらちあかんやろ！！」  
最早屋上はフェンスはめちやくちやコンクリートはボロボロだった。

「ちよつと風見君！！手伝つてよ！！！」

「そんな事言つたつて　　物理攻撃は効かないんだよ！！雉みた  
いに武器なんかないし！！！」

「そんな　　」

やよいはかなり困った。

「おい！やよい！！あれは　　」

「全然使えないの！！もう訳わかんない！！！」

どうやらやよいの能力、翡翠はなぜか全く働かないようだ。

雉は一応戦力として問題はないのだが、3対1ではさすがに厳しい

らしい。

「くそ！もうええわ！！」

「ちよつと雉！！」

雉はわずかに残っている力をほんの少しだけ使って敵を一掃した。

だが

「はめられたね。」

「え？」

風見の一言は正しかった。  
。

「くそ 困かい」

雉がそう言つと、とてつもなくでかい魔物が姿を現した。

「 ははは 今日大量だ ！！」

「ちい！！」

雉はほんの少し力を使っただけで、かなり息が上がっている。  
やはり、今朝の影響が。

「雉！！危な」

「離れろ！！こっちに来るんやない！！！」  
そう言つたとき、敵が大きな刀を振り回した。

雉はやよいの方に氣を取られて、かわせなかった。

「ぎゃははははは！！！」

「雉！！！！！！！」

雉からは血は出ていない。だが、生命力を吸われたらしい。  
息が微弱になってしまっている。

「やばいよ 早く何とかしないと」





「翡翠はまだ十分に制御できていないお前は、その膨大な力を増幅させられたら、肉体がついていかんだろう!!!」

「何で わたしが翡翠だって 知ってる の  
!？」

「ふ そんなに知りたければ教えてやろうか？冥土のみやげにな。」

にやにや笑ってやよいを一瞥した。

「お前は何にもわかつちやいない。たとえばお前の  
」

途中から何を言っているのかわからなかった。

「だめ もう 限 界  
」

やよいは意識を手放した。

「ぎやははははは!!これで翡翠は俺のモノだあ!!」  
汚い笑い声をあげて、やよいにさわるうとした。そのとき、

やよいを守るように緑のバリアーが現れた。  
もちろんやよいは気絶している。

だが、いつの間にか増幅された力を制御したようだった。

「なんだと!!くそ!!こつなつたら・・・」  
そういつて敵は刀をやよいに向かつて振り下ろした。

だが、

「やっぱりこの二人、気に入ったから。お前邪魔。」

「てめえ！！風見　　う　　」

「別に仲間になった覚えはないけど？ただ、珍しいモノがここにあるとしか言っていないし。」

風見はさっきのとは別人のように話し始めた。

「増幅された力を制御するなんて　人間では普通はできない芸当だし。だから　　」

「な　　！！」

突然、風見の目が真っ赤になった。

消えてなくなれ

風見がそう言った瞬間、魔物は一瞬で塵となって消えた。  
。

そして、壊れた周りが、みるみるうちになおっていく。

「面白いよ。いったい何年ぶりかな？」

愉快だと言わんばかりの口調で、楽しそうに風見は呟いた。

## わけわかない自分の力

「あれ？ わたし」

やよいは目を覚ました。

周りを見渡すと、何の変哲もない屋上だった。

「何してたんだっけ？ 確か 雉と話してて 風見君が

来て 敵が ！！」

慌てて飛び起きた。だが、誰もいない。

魔物も、風見も 雉までもが。

「雉？ 雉！！」

不安になってそう言ったら、違う声が返ってきた。

「彼ならここにいるよ。」

背後から声が聞こえたので慌てて振り返るとそこには風見が立っていた。

「運がよかったね。彼、まだ大丈夫みたい。」

「ちょっと待つて！！どういう事！？あの

魔物は！？」

風見はやれやれというようにやよいを見た。

「君が力を使っただだよ。満身創痍の状態で。」

「わ わたしが！？」

「君、宝玉を持っただだね。」

「うん。」

やよいはおそるおそる答えた。

「大丈夫。誰かに言ったりしないから。」

風見はそう言って笑った。

やよいはほつと安心したが、雉を見て表情が変わった。

「ねえ！！雉は　　！！」

「今は生きてるけどかなり危ない状態だよ。」

「そんな　　いったいどうしたら　　わたしの力じゃ無理なの？」

やよいはそう言って風見を見た。だが風見は首を横に振った。

「できればいいんだけどね。君は見たところ翡翠でしょ？翡翠は回復能力はあんまり期待できない。傷ぐらいなら治癒できるけど生命力の回復は無理だと思っよ。」

「そんな　　」



「方法がないって訳じゃないけど。」

「え！？あるの！？雉を助ける方法！！」

やよいはすがりつくような目で風見を見た。

「うん。だけどそれはかなり危険なんだ。」

「やる！！それでもやる！！お願い教えて！！！！！！」

「後で後悔しないでね。」



その言葉の意味は、今のやよいにはわからなかった

。



「それってどういう

」

「じゃあ、少し待ってて。準備するから。」

「準備って？」

「行くんだよ。」

どこにと聞こうとした瞬間に風見は静かにこういった。

「回復の宝玉、カーネリアンを持つてゐる奴のところへ。」

「  
カー  
ネリアン  
？」

「そう。色で言ったら赤かな？回復を主に扱う宝玉。知り合いだから。」



「ねえ            風見君って            」

「琉度でいいよ。やよいちゃん。」

いきなりやよいちゃんと呼ばれて驚いたが、すぐにこう続けた。

「琉度って何者なの!？」

その質問に琉度は笑顔でこう答えた。

「ただの高校生に見えないハーフだよ。」

「外国人との?」

「そう言う意味じゃなくて            」

「じゃあどういう意味?」

「悪魔と人間のハーフだよ。」

そう言った彼の目は、血に染まったような赤い目だった。



## 入り乱れる思考

「カーネリアンを持つてる奴のところへ行こう。」

そう琉度に言われたやよいは、静かに琉度が準備をすますのを待っていた。

何か手伝おうかと言ってみたが、「大丈夫だから少し待ってて」と言われ、そつと焦る気持ちを落ち着かせようとしていた。

雉は一向に目を覚ます気配はない。

それどころか雉の体は少しずつ冷たくなってきているような気がする。

「雉。。」

さわっても何も変わらないとわかっていたが、そつと雉の頬に触れ、優しくなでた。

不安がどんどんこみ上げてくる。

そんなとき、そんな不安を吹き飛ばすような声がかかった。

「準備できたよ！」

「ほんと!？」

琉度はそう言ったが、特に変わったことはない。

「えっと      どうすんの      ?」

少し心配になって聞いてみた。

だが、琉度はにっこり笑って

「まあ落ち着いて。」

と言った。

そして琉度は目を閉じた。

すると、いきなり空気が凜としたものにかわり、真っ白の陣が地面に浮かび上がった。

そして、その陣に小さなゆがみができ、次第に通れるトンネルのようになっっていた。

「行くよ。」

「えええ！?!?!」

やよいは驚く暇もなく、琉度に引っぱられて時空のゆがみに飛び込んだ。

「           ここ           どこ           !？」  
気がついたら、周りは霧がかかったように真っ白だった。  
身近に感じるような気もするが、こんなところは初めてだった。

「ここは、霊樹の幹の中だよ。」

「霊樹!？」

「あれ?知らないの?学校の樹齢100年の木。それが霊樹で、  
今は           」

「その木の中に居るって事!？」

信じられないように周りを見た。

何も見えないけど、何か居るような気がしたから。

耳をすましていると、小さな足音が聞こえた。

やよいは身構えたが、琉度は余裕で微笑んでいる。

足音がだんだん大きくなり、こちらにやってくる者が肉眼で見える  
ようになってきた。

そのときに見えたのは、小さな少女。  
髪はピンク色のショートヘアで、目はきれいなアクアマリンのよ  
うな色をしていた。

その少女はやよいに気づくと、そっと声をかけてきた。

「こんなところに 何用ですか？」

「あ あの」

やよいはとつさの事でうまく言えなかった。

そんなやよいの代わりに琉度は答えた。

「実は君の力を貸してほしい。助きたい奴がいるんだ。」

「あなた 琉度ではないですか。お久しぶりです。」

その少女は改まってお辞儀をした。

やよいも慌ててお辞儀をする。

「先ほどは失礼いたしました。琉度の知り合いですよね？」

「あ はい。」

「わたしは都と申します。ご存じの通り、カーネリアンを持っています。」

彼女、都はそう言った。顔には表情が全くない。まるで感情もないかのように。

「それで？お助けしたいと申すお方は？」

「彼を 雉を助けてほしいんです！！」

都は一瞬目を見開いた。そして静かに

「 そう ですか」

と告げた。

さつきとはまるで様子が違う。

顔には、懐かしさと切なさがにじみ出ていた。



「わかりました。少しお待ち下さい。」  
「都是そう言っと、すっと姿を消した。」

「どうしたんだろ。雉と何かあったのかな。」

そんなやよいの疑問に琉度は静かに答えた。

「彼女は雉の妹で、巫女なんだよ。」  
「い　妹お!？」

やよいは驚いたが、次の言葉に息をのんだ。

「彼女は巫女だから  
ちやならないんだよ。」

一族の命令で妖魔である雉を殺さなく

「え  
？」

小さな声が、響き渡った。  
。



## 冷たい過去

「ちょ　　ちよつと待ってよ！！それって　　雉は　　」

「彼女しかいないんだ。カーネリアンを持っているのは。」

琉度はそう告げた。

「それに、彼女は雉を殺したいとは思っていない。逆に好きなんだと思うよ。」

その言葉にやよいはさらに驚いた。

「それじゃあ　　都さんは　　」

好きな兄を、一族の命令で殺さなくてはならない。

そう言う事になってしまふ。

「じゃ　　じゃあ、何で一族の命令に従わないといけないの！？」  
やよいには信じられなかった。命令だからといって、自分の好きなようにできない事が。

その思いが琉度にも伝わったのか、少し切なそうに琉度は言った。

「少し、雉の過去を教えてあげる。プライバシーの侵害にならない程度だけ。」

昔、雉はとある結構有名な寺で生まれた。

元気で怖い物知らずのわんぱく小僧だったらしい。

そしてその3年後に、妹の都が生まれた。

兄弟はとても仲がよく、いつも一緒にいた。

だが、両親は兄を寺の僧、妹を巫女にして一族をもっと大きくしようとしてしか考えていなかった。

雉は将来、侍になりたかった。だが、両親はそんな事を許してくれるはずもなく、仕方なくこっそりと剣技を磨いていた。

時は流れ、雉が17、都が14歳になったとき、両親は強引に二人を自分たちの思うようにしようとした。

だが、雉はそんな両親が嫌で、この寺を出て行こうと決心する。

ある満月の夜、雉は寺を出ようとした。

そのとき、都が止めにかかる。

「なぜ！？なぜお兄様は寺の僧になるのが嫌なのですか！？」

「俺は自由に生きていきたいんや。一人の侍として。だから、ここで親のいいなりにはなりとうない。」

雉の決意は固かった。都はそれを聞いて

「ならば、わたしもともに参ります！」

そう言った。

だが、そのとき両親に見つかってしまう。

雉はとつさに身構えたが、都が雉に

「逃げてください！！ここはわたしが引き受けます！！」

「都　　！！すまん！！」

そう言つて雉は逃げ、都は捕まつた。

親は雉を何とか探そうとしたが、都が

「お兄様を捜すというのなら、わたしは今すぐ腹を切ります。」  
そう言つて、兄のために巫女になった。

だが、兄はその半年後に殺され、妖魔になつてしまう。  
都は悲しみに明け暮れた。だが、雉は妖魔として再びこの世に召還された。

都はそのことを親から聞き、とても喜んだ。  
しかし巫女は悪を浄化する存在。  
巫女として、悪は払わなくてはならない。

両親からでた言葉は

妖魔となつた雉を殺せ

つまり

「つまり、雉を守るために巫女になったのに、雉を殺す存在となつてしまった　　というわけだよ。」

「そ　　そんな　　」

あまりにも悲しすぎる。いくら掟だからと言っても。

「一度は彼女も雉を殺そうとしたんだけど、雉は恐ろしく強くなつてて、齒が立たなかつたんだって。」

やよいは眠り続ける彼を見た。

こんな悲しい事があつたなんて。

「つて、なんで琉度がそんな事知ってるの!？」

「結構物知りなんだよ。ハーフだし。いろんなところから情報が入ってくるんだ。」

「へえ　　。」

そういうもんなの?と半ば少しあきれたが、都がやってきたので話は中断された。

「お待たせしました。準備ができたので　　雉を　　こちらに。」

「あ　　はい!!」

そういつて雉を都の前に寝かせる。

都は複雑な顔で治療を始めた。



手から出てくる赤い光はそつと雉の体を包み、回復させていった。

「すごい カーネリアンって  
正直うらやましかった。何もできない自分と違って、雉を助けることができるというのが。」

「  
うう  
」  
「雉!!」  
「  
」

雉はそつと目を開けた  
。

## 時がたつても

「雉！！よかった。」

雉はそつと目を開けて、やよいの方を見た。

「やよい」

見知らぬ場所なのでふと周りを見渡そうとして、表情が変わった。

近くにいる、都を見たから。

都も複雑な顔をしている。

「

「お前が 俺を」

「カーネリアンの力で、です。決して巫女の力でお助けしたのではありません。」

「んなことどうやったってええわ。 何でお前が」

雉は怒りが混じった声でそう呟いた。  
そして冷たくて鋭い目で都を睨んだ。

「やよいさんに頼まりました あなたを助けてくれと

人間の頼みには巫女は応じます。」

負けじと凜とした空気を放って都が話す。

「なんやと？」

雉は先ほどから殺気も出し始めた。

回復してもらったのに、礼はしないし逆に睨みつけるなんて。

「ちょっと 二人とも」

「言っただって無駄だよ」

風見はそう吐き捨てるように言った。  
でも、いくらなんでもこれはひどい。

「ふざけんのもたいがいにしるや!!」

「ふざけてなどいません!!」

「じゃあ何で俺を助けたんや!!」

「そ　それは　」

「いい加減にしなさいよ　」

ふとやよいの小さな声が聞こえた。

「え?　ちよつとやよいちゃん?」

琉度の声も聞こえていないのか、ふらつと立ち上がる。

「や　やよい　?」

「やよいさん?」

二人もさすがに驚いてやよいの方を見た。

だが、やよいはそれすら聞こえてないようだった。

「妖魔だの巫女だの　そんな事でけんかして　」

やよいの体に、緑色の光が集まってきた。

翡翠の力が高まってきているようだ。

「おい!!　やよ　」

「んなくだらないことでけんかするな!!　とくに雉!!!!」

そう言つて雉を指さした。

雉はもう訳がわからない。

「その腐った根性直してこい!!!!」

そう言つた瞬間、雉の近くで大爆発が起こった　。

「つてて            つて、やよいい！！てんめえ何すんじゃボケエ！  
」！

「うるさい！！黙って聞いてればごちゃごちゃと！！回復してもら  
ったくせに礼もうまく言えないの！？」

「じゃかしい！！何で天敵の巫女に            」  
そう言っただけはうつむいた。

口ではそう言っているが、どうしたらいいかわからない。そんな気

がした。  
やよいはそんな雉を

もう一回爆発させた。

「うわー やよいちゃんごつついことを 翡翠が爆発系苦  
手でよかったねえ。」  
琉度はそう言つて雉の元へ足を運んだ。  
「おいコラア！！1度だけでなく2度までも！！」  
「うるさい。あんたがここまで物わかりの悪い奴だなんて思わなく  
て。」  
「なんやとお！？」  
「あーらなによー！！」

「あーあ 始まつちやつたよお約束が。」  
琉度の言つた通り、うるさいのが始まつた

が

「ふ あはははははは！！」

突然都が笑い始めた。今まで無表情だった都が。

「み 都 さん？」

「ごめんない だって あんまりにも面白くって

「**都はまだ笑い足りないのか、おなかを必死で押さえている。**」

「雉はお兄様はおそらくわたしのために演技してたのに」

「ええええええええええ！？！そうだったの！？！」

やよいはものすごい勢いで雉をみた。

やよいはものすごい勢いで雉をみた。  
雉はあっけにとられていたが、ぼそりと

「そんなつもりやなかったんだけど  
まあそないなるんかいな」

と答えたとか。

「ご　　ごめんなさい　　」

「いいんですよ。お兄様の　　久しく見ていなかった笑顔が見られたんですもの。」

そう言つて都はぎこちなく微笑んだ。笑うのは本当に久しぶりのようだ。

「大丈夫なんか？お前　　俺とおつても　　」

「わたしも逃げたんです。今は巫女は続けていますが、なるべく一族とは接触しないようにしております。ですが　　そろそろ危なそうです。」

「見つかりそうなんだね。」

「はい　　」

琉度の問いに都は悲しそうに答えた。

「お兄様は妖魔ですから　　巫女の気配とは大きく違うようで　　」

「んなら、さつさと退散するわ。ありがとつな、都。」

「はい！」

そう言つて二人は笑つた。

何百年の歳月も気にしないような、そんな笑い顔だった。

「そう言えば今更だけど、巫女つて長生きできるの？」

やよいの素朴な質問には琉度が答えた。

「本来の巫女つて言うのは巫女さん姿してる奴の事じゃなくて、一度死んで神の力によつて再生された者を巫女と呼ぶんだよ。だから巫女は死ぬ事はないんだ。姿も自由自在に変えられる。」

「一度死ぬの！？」

「死ぬつていつても、魂を取り出すというか　　なんかそう言う儀式があつたみたいだよ。」

「へえ　　。」

そこまでしてなるようなものだろうか。

ふと不思議に思ったが、雉の声でその思考は途絶えた。

「おい。そろそろ行くで。」

「うん！行こう、琉度。」

「はいはい。じゃあ下がって。」

そう言っで、琉度は小さな白いペンダントを取り出した。するとここに来るときと同じような陣が浮かび上がった。

「じゃあ　　ありがとうございました。」

「お元気で。兄を頼みます。」

そう言っで、都は静かに笑った。

作られたトンネルをくぐっている最中、ふとやよいは呟いた。

「何か今日災難だなあ　　朝も昼も　　」

「仕方ないよ。翡翠なんてレア中のレアだし。」

「なんやお前ばてとんのかやよい。」

「誰のせいだと思っでんの！！！！」

「はいはい悪かった。」

「ほんとに反省してるの？（にやり）」

「キモイ！！琉度そのキモイ笑い顔やめんかい！！」

そう言いながら、3人は元の世界へと戻っていった。





## 現れた、新たな謎

雉が治って1週間が経った。

いや、経っていたと言う方が無難かもしれない。

「ねえ！！大丈夫だったの！？やっぱり誘拐！？」

「ちゃんといつてよ！！」

「まさか神隠しとかいうんじゃないだろうな。」

やよいと琉度は学校に帰ってきた瞬間、質問攻めだった。

やよいは最初、わけがわからなかった。

「ちょ　　ちよつと！！いったい何の　　」

そう言いかけたやよいの代わりに琉度が凜とした声でこういった。

「悪いけど、警察に口止めされてるんだ。事件の事は決してもらすなつて。」

そう言ってやよいを引き連れて琉度は教室を後にした。

そしてまたまた屋上にやってきた。

「あゝもうどうなってるのよこれ!!」

「カレンダー見たでしょ？その通りだよ。」

「じゃあなんであの木の中ではだいたい1時間ぐらいしかいなかったのに帰ってきたら1週間も経ってるのよ!!」

そう、やよい達が元の世界に帰ってきたときには、雉を助けるために霊樹に入ったときからなんと1週間も経っていたらしい。

その間は警察沙汰にもなり、大きな話題になったようだ。

やよいの問いにはふと出てきた雉が答えた。

「あの木の中は空間が歪んだからな。何が起るかわからんねん。」

「雉!!（びっくりした）それってどういう事？」

「簡単に言つとやなあゝ 木の中から出るときに空間を無理矢理こじ開けて帰ってきたさかい、ただ3分ぐらいしか歩いてなくても実際の世界では多くの時間が経ってしまったつちゆうこつちゃ。」

「そんな」

「学校側はなんとか隠しきつてくれてるようだけど 結構まず

い事になりそうだよ。」

琉度はそう言っただけ息をついた。

確かに生徒が昼休みに突然消えて、1週間後に何もなかったかのよう  
に現れてと、学校側からしたらとても不可解な現象である。

多分教師達には何を言っても無駄かもしれない。

「じゃあ　　いったいどうすれば　　。」

やよいはそう言っただけ息をついた。

「じゃあ、僕が何とかしてあげるよ。」

「琉度!?!」

琉度はそう言っただけと笑った。

「やよいちゃんならボロが出るかもしれないでしょ?僕に任せてよ

!?!」

「でも　　」

「いいからいいから。雉の事はちゃんと伏せとく。」

そう言っただけ琉度は職員室に向かって屋上を後にした。

「大丈夫かなあゝ琉度　　」

「あいつの事やから何かたくらんどるんやろ。心配あらへん。」

雉はそう言っただけやよいの頭にポンと手を置いた。

「言い忘れとっただけ　　ありがとうな　　。」

雉はそれだけいうと、ふっと鳩に姿を変えて飛んでいった。

「

馬鹿

」

小さな言葉は誰にも聞こえなかった。

授業があるので教室に帰ってきた。

教室に帰るとてつきり質問攻めにされると覚悟していたが、

「やよい〜どこ行ってたの？次は移動だよ！！」

「早く行こうよ！！」

など、質問とはかけ離れた声をかけられた。

まるで何もなかったかのように。

「え　？」

ぽかんとしているやよいの耳に、追いつきかけようという声が聞こえた。

「やよいちゃんも早く行かないと遅れるよー!」  
その声は疎度だった。

「あ　ちよつと待って!」  
訳がわからないまま慌ててみんなの後を追っていった。

結局、その日は屋上から教室に戻って一度も1週間消えていた事を質問されなかった。

しかも、家に帰っても同じように、何事もなかったかのように  
「おかえりーお姉ちゃん。あ、雉さんもいらっしやーい。」  
「おかえりやよい。あ、どうも。」  
ごく普通の返事がかけられただけだった。

何もなかった。

いや、1週間やよいと疏度（と雉）が消えていたという事実がなくなっていた。

「どうなってんの

!？」



現れた、新たな謎。

## 謎に謎が重なって

「なんで！？なんでみんなの記憶が・・・もうわけわかんない！！」

自分の部屋で一人叫んでいた。

その様子を雉が少しあきれながら見ている。

「やよいゝ。今ここで叫んでもなんもあらへんし、逆に親や妹にまた怪しまれるんとちゃうか？」

「そうだけど・・・」

確かに雉の言うとおりだ。今ここで取り乱しても何にもならない。でも・・・

「でも、やっぱりおかしいよ。人の記憶あやつるなんて普通にできるの？」

「・・・そこは俺にもわからん。さっきからつつかかってるのはそれやな。」

「翡翠やカーネリアンみたいなかんじのじゃないの？」

「宝玉に、記憶操作の潜在能力があるなんて聞いた事ないで。ますますあやしくなってくる。」

「そうだ！！琉度だ！！」

突然やよいは思いだしたかのようにそういった。

「琉度がどないしてん？あいつがやったとしても言うんか？」

「違う！！琉度も記憶なくなってるのかなって！！」

「まさか」

雉が急に真剣な顔をして悩み始めた。

「どうしたの？」

少し心配になって聞いてみた。

「いや、なんでもあらへん」

結局雉は何を悩んでいるのか、わたしには教えてくれなかった。

「っというわけで。」

「いやいきなりっというわけだって言われても。っっていうかいつこに來たの!？」

話は飛んで、現在琉度の家。

「雉に飛んでもらったの。」

「なんですかその不気味な笑顔は・・・まあいいや。要するに、僕が記憶あるかないかってこと？」

「うん!!そういうこと!!」

やよいはかなり真剣なまなざしで琉度を見た。  
雉も少し用心深く見ている。

「で、いったい何のことです? いったいどこの記憶のこと?」

「あ 説明してなかったつけ。」

やよいは少し崩れて、気を取り直して続けた。

「わたしが琉度に頼んでカーネリアンを持つ雉の妹さんのところに行った記憶!!」

「うん。普通に覚えてるけど?」

やはり琉度は覚えている。

別に覚えていても覚えていなくてもあまり結果は変わらないような

気もするが。

「じゃあ あれはいつたい誰が」

「あれって？」

琉度は興味津々に聞いてきた。

「琉度も知ってるでしょ？ 私たちが1週間消えていたっていう話！  
！なぜかそれがみんなの記憶から消えちゃってるのよ！！」

やよいはそう言っただけを見た。

琉度は相変わらずおっとりとした顔。

しかし、続けた言葉にやよいと雉は驚いた。

「そんなの簡単じゃん。これを使えば。」

そう言っただけで琉度はある物を取り出した。  
それはただの小さなマイク。

「はい？」

雉とやよいは声を重ねてそう言った。

「闇の通販で買った。」

「なんですってええええ！！！！？」

「なんやとおおおお！！！！？」



「何？これって結局骨折り損のくたびれもうけ？」  
やよいはため息をつきながらそう言った。  
雉もかなり脱力している。

「ちよつと二人とも。僕を疑ってたの？」  
「違うよ。原因がこんな事だったなんて。」

「  
」  
「どうしたの雉？」

少し思い詰めた顔をしている雉を見たやよいは、気になって声をかけてみた。

「いや　なんでもあらへん。帰るか。邪魔したな。」

「ごめんね琉度!!」

二人はそう言って琉度の家から出ていった。

「　　相変わらず鈍いんだか鋭いんだか

琉度はそう言ってあやしい笑みを浮かべた

。　」

「ねえ雉。さっき何を悩んだの？」

やよいは琉度の家を出る前の雉の顔が気になって聞いてみた。  
すると雉は悩んだ顔でこう告げた。

「琉度のことを疑っているつもりはないねんけど 普通はいくら通販でその商品があっても 相当な力がないと、できんや」。

「え ?」

雉の一言で、風向きは大きく変わった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6652a/>

---

雉

2011年1月6日14時23分発行